

# 1950年代西カリマンタン華人社会における学校教育

松村 智雄<sup>†</sup>

## Education in the West Kalimantan Chinese Community in the 1950s

Toshio Matsumura

This paper discusses education in the West Kalimantan Chinese community in the 1950s, through which it tried to understand its self-positioning in the world. Before the power of the nation-state (Indonesia) prevailed in West Kalimantan in the 1960s, the West Kalimantan Chinese community enjoyed autonomous education mostly influenced by Chinese nationalism.

Before the end of 19th century, there were vernacular schools using Hakka or Teochew language in West Kalimantan. However, with the rise of Chinese nationalism culminating in the Sino-Japanese War, and the following the establishment of the People's Republic of China in 1949, these Chinese schools took on a nationalistic color, and many Chinese students moved to China to enroll in famous universities.

Moreover, the Chinese in West Kalimantan were exclusively literate in Chinese, not Malay, so newspapers filled with reports from the Mainland China were published in Mandarin Chinese. Because of this characteristic of media in West Kalimantan, their "imagined communities" were easily connected to China and Singapore, but not to Indonesian *Peranakan* (mixed parentage) Chinese in Java or to Indonesian nationalism.

### 0. はじめに

本論考は、現在ではインドネシアの一州となっているものの、比較的インドネシア国家の枠組みに編入されるのが遅く、独自の自生的社会秩序が存在したカリマンタン島西部（以下西カリマンタンと呼ぶ）の華人社会の1950年代の状況を主題としている。西カリマンタンには18世紀中葉以降、中国南部からの移民が多く、彼らは金鉱開発に携わった。当初彼らは、当地のスルタンのもとで使役されていたものの、その後独立し、自律的な複数の政体を築くに至った。19世紀には、これらの政体とオランダ政庁との抗争も多発した。1950年代には、当地の華人たちにとって、ジャカルタよりもシンガポールの方が地理的にも心理的にも近かったのであり、実際に人の行き来も盛んであった。また、西カリマンタンと地続きの現在のマレーシア領サラワク州は、当時は英国の統治下にあったが、こちらとの相互交渉の方がジャカルタとのそれよりも活発であった。このような地域の特性を考察することによって、ある地域が国民国家に編入されることの暴力性が浮き彫りになる。西カリマンタンは自明のように国民国家に組み入れられたのではなく、1960年代の軍事支配を以てそれは成し遂げられたのである。

特にインドネシアの場合、あたかも多様な地域に住む様々な背景をもつ人々が協力してインドネシア国家、インドネシア民族を作り上げたというナショナルヒストリーがよく語られる。しかし国家の

---

<sup>†</sup> 早稲田大学アジア太平洋研究センター助手 Research Associate, WIAPS

支配が及びにくく、しかもその支配のほころびが見えやすい国民国家の「辺境地域」とも呼べるような西カリマンタンの歴史状況を振り返るときに、国家の領域支配が及ぶ条件として、単に合意形成過程や「想像の共同体」論では済まず、強制的な国家による統治が必要であるという、国民国家形成のリアリティーを感受することができるのである。石川登は、国民（ネイション）意識の形成の問題と国家主導による統治の問題を区別することの重要性について述べているが、一旦成立した国家は、その「中央」からはじめて、「辺境」地域（「中央」とは文化的、歴史的、言語的共通性を持っていない可能性のある地域）に対しても、その統治を強権的に（最終的には武力を用いて）行うことができるとする〔石川 2008: 2-21〕。西カリマンタンの場合も、インドネシアの国民国家の「中央」たるジャワとは文化的、歴史的背景が異なり、「共同体意識」を共有することがなかったが、物理的にインドネシア国家が「辺境」たる西カリマンタンに支配を確立することは可能であった。それは1960年代に西カリマンタンに暗躍した共産主義ゲリラを討伐するために、1967年以降、反共のスハルト政権がこの地に軍事統治を敷くことによって達成された。その後インドネシアへの帰属意識を定着させるための人為的な教育活動を通じて同化政策（それは華人が主であったが、その他の民族に対してもインドネシア国民意識の醸成が図られた）が展開された。これは多民族国家において、「中央」による教育等を通して少数民族を多数派に同化させようとする動きに一般に見られる特徴である。

その「辺境地域」の個性がより浮かび出るのは、盛んな移動を繰り返していた華人社会においてである。西カリマンタンのような辺境地域の只中において、とりわけ「辺境性」を持つ華人社会の特徴をかんがみ、本論考においては、インドネシア国家の影響が及ぶ前の時代、すなわち1950年代の西カリマンタン地域の華人社会における学校教育に焦点を当てる。

### 0-1. 1950年代の西カリマンタン華人の自己意識

1950年代の西カリマンタン華人が自らの住む地域や民族をどのように捉えていたのであろうか。彼らが自らを世界の中に位置付ける際に、それは西カリマンタンの民族関係の中でなのか、西カリマンタンという地域的な括りか、あるいはインドネシアというナショナルな括りか、トランスナショナルな華人という括りか、自らは中国に属するという「遠隔地ナショナリズム」〔アンダーソン 2005〕とも呼べるような認識なのか、という点である。「出版資本主義」をナショナリズムの源泉のひとつと主張するアンダーソンは、この出版資本主義により、直接に顔を合わせずとも、文字言語の共有によるナショナルな括りでの共通の出来事の追体験を通じて、同じ境遇にあると自覚した人々の間に連帯意識が生まれたと説く〔アンダーソン 2007〕。これを踏まえると、1950年代の西カリマンタンの華人メディアが専ら中国語のものであり、彼らが中国での同時期の状況を報じる内容に親しんでいたことは、彼らの自己認識を考える上で重要である。一方、ジャワのプラナカン華人の場合、中国語が読めず、オランダ語やマレー語の読み書きをした<sup>1</sup>。またプラナカン華人知識人たちは、マレー語を用いて新聞を発行し、優れた文学作品を生み出していた。これと対照的に、西カリマンタンにおいては、知識人の言語は専ら中国語であった。ジャワのプラナカン華人には閉ざされており、西カリマンタン

<sup>1</sup> プラナカン華人とは、主にインドネシアにおいて数世代にわたって居住し、現地化した華人（中国語では土生華人と表現する）を指す。このプラナカン Peranakan の語は、「子ども」を表す anak を基語としており、世代を経た華人の地元の文化との混雑、地元民との混血をも表す言葉である。

の華人には開かれていた中国語の言語空間という「想像の共同体」は、容易にシンガポールおよび中国に接続するものであった。

さらに、西カリマンタンの華人が運営する小学校レベルの教育機関は、古くは、20世紀初頭に中国ナショナリズムが勃興する以前から、沿岸部の華人が特に多い地域はもちろんのこと、大きな華人コミュニティが存在した内陸部の金鉱地帯においても存在していた。これらの学校は、20世紀に入って増加し、20世紀に入ると中国南部から渡ってきた教師がこれらの中国語の学校で教えるのが一般的となった。また、ポンティアナックやシンカワンのような中規模以上の都市には中等教育機関が誕生した<sup>2</sup>。ポンティアナックの「坤甸中学」<sup>3</sup>、「振強学校」、シンカワンの「南華中学」はその代表である。教師の中には西カリマンタン出身でありながら、中国に一時期住み、そこで高等教育を受けた人物が多かった。1949年の中華人民共和国成立後、中国帰りの教師の影響を受け、学生の間では中国への愛国心が育まれた。この愛国心の高揚の発端となったのは、抗日戦争に際しての「中国人」の団結意識であった [Hui 2011: 76]。西カリマンタンにあった中学校、高等学校を卒業した後、中国の大学に進学するコースを選ぶ人も多かった。彼らエリートは、新しく成立したインドネシアの動向にも関心を持っていた。1950年代、西カリマンタンの華人は総じて、自らがインドネシアという国家に属するとは思っていなかった。インドネシアという存在は知っていても、それに自分たちが属することになるとは夢にも思わなかったのである。

## 0-2. 先行研究

西カリマンタンの華人史を主題とした古典とも言えるのがソマーズ・ハイトヒュースによる著書 [Somers Heidhues 2003] である。本論考でも引用するが、専らインドネシア独立前の時代のオランダ政庁関係の資料を利用して著述されており、オランダ植民地期の西カリマンタン（当時の蘭領西ボルネオ）に関する記述は豊かであるが、インドネシア独立後の1950年代については、利用できる公文書に限りがあることから、詳細は論じていない。その後の西カリマンタン華人に関する研究で特筆すべきは、許耀峰 (Hui Yew-Foong) によるものである [Hui 2011]。この著作には1950年代に関する記述も多くあるが、歴史的な理解というよりも、当時の西カリマンタン華人がいかにか中国に引き付けられていたかを強調したものとなっており、華人社会、特に学校教育機関のさまざまな志向の陰影を詳細に描くまでには至っていない。本論考は、これらの先行研究を参照しながらも、筆者が現地でも収集した資料およびインタビュー資料を活用することによって、この地域の1950年代の学校教育の状況を理解することを目的とする。

## 1. 自生的教育機関

中国ナショナリズムの興隆以前から、客家語や潮州語といった現地語を教授言語にした中国語教育は行われていたことはすでに述べた通りである。1838年には、モントラド (Monterado) に4校、マンドル (Mandor) に3校の学校があった。当時、この地域で活動した宣教師の記録によると、相

<sup>2</sup> ポンティアナックおよびシンカワンは、西カリマンタンの主要都市であり、西沿岸部に位置する。どちらも特に華人が集住している都市である。

<sup>3</sup> 「坤甸」はポンティアナックの中国語表記である。

当数の大人は読み書き能力を持っていたという。シントン (Sintang) のような内陸部においても、1899年には学校があったことが報告されている。そこでは、農業（主にゴム栽培）を行う人々の子弟は中国語を学習していた [Somers Heidhues 2003: 186]。オランダ政庁の記録によると、1890年、西カリマンタンには華人が建てた私立学校が46校あり、生徒は263人いた。また1899年には、学校の数54校に増加している。これは、ジャワを除いた中国語が教授される総学校数の3分の1を占めていた。西カリマンタンの学校数は、1901年には80校に増加しており、1009人の生徒がいた [Somers Heidhues 2003: 187]。20世紀に入るとこれらの学校にも中国ナショナリズムの影響が深く刻まれるようになる。1922年に西カリマンタンの華人が自ら運営する学校を調査したオランダ政庁の役人は「学校は中国ナショナリズムの影響を受けているものの、オランダ人に反発するものではない」と書き残している。オランダ政庁としては、教師のみを監視対象とし、学校に関しては監視をしなかったようである [Somers Heidhues 2003: 187]。

第二次世界大戦前において最も有名であった学校は、ポンティアナックにあった「中華学校」であった。これは、1908年にポンティアナックの有力者が作った学校である。1939年、この学校には220人の生徒がいた。同じくポンティアナックの中等教育機関であった「振強学校」には、200人以上の生徒がいた。またこの学校には「徳育学校」という名の女子部があり、160人ほどが学んでいた [Somers Heidhues 2003: 187-188]<sup>4</sup>。

ソマーズ・ハイトヒュースが著作の中で強調していることは、これらの学校は、ジャワと同時期に設立されているが、ジャワから西カリマンタンへの影響はほとんどなかった点である。これを証明する事例がある。1940年代に華人の歴史を記したニオ・ユラン (Nio Joe-lan) は、20世紀初頭の華人の教育機関として有名な「中華会館 (Tiong Hoa Hwee Koan, THHK)」<sup>5</sup>の歴史にも触れているが、そこでTHHKは、西カリマンタンにおいては全く組織的な活動をしていないとし、南カリマンタンのバンジャルマシ (Bamjarmasin) の中華学校はTHHK系であったが西カリマンタンの学校は別系統であったと述べている [Nio Joe Lan 1940]。オランダ政庁の史料によると、当時、多くの西カリマンタンの華人の子弟がシンガポールで教育を受けていた。バタヴィア (Batavia, 現在のジャカルタのオランダ植民地期の名称) ではなくシンガポールとの紐帯のほうが強かったのである [Somers Heidhues 2003: 188]。

## 2. 中国ナショナリズムの流行

インドネシア独立当時の華人社会のありようは多様であった。ジャワのプラナカン華人の場合には、新しく立ち上がったインドネシア国家に対して、それに反発するも同調するも、それを自らのものと受け止め、中国に移動するなり、オランダに移り住むなり、インドネシアに残って生き続けることを選択するなど、インドネシアの成立を踏まえた行動をとっていた。しかし西カリマンタンの華人の場合には、そもそもインドネシア国家成立の直接的な影響はまだ及んでいなかった。

<sup>4</sup> ポンティアナックの女学校「徳育学校」の設立は1911年である。またポンティアナックからカプアス川を挟んだシヤンタン (Siantan) 地区には「新草学校」(1921年設立)があった。「巴城新報 25周年記念特刊: 東印度華校調査表」参照。

<sup>5</sup> インドネシアの華人が自ら開いた学校では、ジャワの「中華会館 (Tiong Hoa Hwee Koan)」が代表的である。「中華会館」はジャワの福建系華人が1900年に初めてバタヴィアに建設した華人の集会所兼中国語教育施設である。これがバタヴィアに建設されて以来、インドネシアの各地に「中華会館」の分校が作られていく [Lohanda 2002]。

このような時代において、西カリマンタンの華人の自己認識にはさまざまな様相があった。20世紀初頭の中国ナショナリズム勃興の時期以前から、潮州語を話す人々の同胞意識（潮州人意識）、客家語を話す集団の同胞意識（客家人意識）はすでにあつた。これに加え、20世紀に入り「われわれ中国人」という自己意識が力を持ち始めた。このように当時、華人とはいってもその帰属意識のあり方は多層的であり、それは居住地域によっても異なっていた。都市部の高等教育を受けたエリートの間では、20世紀初頭の中国ナショナリズムに強い共感を抱く人々が存在した一方で、西カリマンタンの内陸部では従来の客家人意識、先住のダヤク人（Dayak）と呼ばれる人々との一定の距離を置いた連帯感が混ざり合っていた。

1949年の中華人民共和国成立は、西カリマンタン華人社会に変化をもたらした。特に西沿岸部の都市部において、中華人民共和国の成立を自分たちの喜びとしてかみしめ、自分たちをその一員と考える機運が高まったのである。1950年代前半の、この新しい国への希望が満ち溢れていた時期には、西カリマンタンからも大学教育を受けるために多くの若者が続々と中国を目指した。これは、中国語で教育を受けてきた彼らからすればごく自然な選択であった。

西カリマンタン華人の中国ナショナリズム興隆以降の「中国人化」の過程は、ジャワの同時期の活動を経由していなかったという特徴がある。それまでであった中国語の教育機関に中国ナショナリズムの影響を受けた民族主義的教育内容が接ぎ木されることによってスムーズに発展した。その間に、ジャワのプラナカン華人が経験した葛藤はそれほどなかった<sup>6</sup>。また彼らの間にはすでに自前の中国語教育が浸透していたために、オランダ政庁がオランダ式の教育を普及させようとしても、西カリマンタンの華人はそれほど呼応しなかった。1920年のオランダ政庁の報告の中には、「政庁が華人のために設立したオランダ語学校であるオランダ中国人学校（Hollandsch-Chineesche School: HCS）に西カリマンタンの華人が関心を寄せないのは不思議だ」という記述がある〔Somers Heidhues 2003: 189〕。これはジャワでは、一定数の華人がオランダ語教育を強く望んでいたのと対照的である。西カリマンタンの華人がオランダ語よりも重視したのは標準中国語と英語であった〔Somers Heidhues 2003: 189〕。宗主国の言語よりもより広がりを持つ言語への関心が高いというのは、オランダの植民地支配の境界に必ずしも収まらない彼らの帰属意識の特徴の一端を表すものといえよう。

1930年代になると、華人が運営する学校は100校以上になる。シンカワンの北に位置する港町、プマンカットにも4校あり、そのうち2校は、客家系住民が運営していた。1校は潮州系、もう1校は福建系であった<sup>7</sup>。また、華人社会を束ねる組織である「商会（Siang Hwee）」が1908年に設立された。この支部は各地にあり、ポンティアナックの本部が全体を統括していた。そのほか、中国のナショナリズム思想について議論する勉強会である「書報舎（Shu Pao She）」も各地で発展した〔Somers Heidhues 2003: 191〕。

ただ、これらの学校が中国の動きと連動していたかという点もそうでもなく、中国内部でもまだ分裂

<sup>6</sup> コペル（Coppell）が指摘するように、ジャワのプラナカン華人は、中国起源の言語を用いて生活する能力がすでに失っており、彼らの日常の会話はジャワ語などの現地の言葉を用いていた。そのような中で、「中国人化」が進んだ結果、現地の文化と中国人としての文化がそぐわないとして、ジャワ的な文化風習を排除すべき、そして、中国人としてのアイデンティティを純化すべきという運動が起こった。こうして、それまでのアイデンティティとの間に葛藤が生じた〔Coppell 2002: 313-333〕。

<sup>7</sup> 当時プマンカットで学校教育を受けた李紹発へのインタビュー、ポンティアナック、2011年1月14日。

状態が続いていたために、本格的に「中国人」意識が高まるのは、やはり日中戦争（1937-45年）以降であった。この時代、反日を旗印にしてシンガポールと西カリマンタンの華人が協力するという動きもあった [Hui 2011: 35-69]。例えば、西カリマンタンで日本時代に抗日運動を展開する「西盟会」が組織されたが、結成時の会員には、シンガポール出身の人物が散見された [Hui 2011: 52]。また、1950年代に西カリマンタンで普及していたメディアには、「黎明報」や「誠報」のようなポンティアナックで発行されていた新聞<sup>8</sup>、ジャカルタ発行の中国語紙に加え、シンガポールで発行されていたものも含まれていた [Hui 2011: 80]。

西カリマンタン出身者で、中国大陸で日本軍と戦った経験を持つ人もいる。日本降伏後、国共内戦、そして、1949年中華人民共和国の成立による「祖国の解放」という物語を共有する人々が育った。許耀峰によれば、1945年に結成された「中華公会」が当時の華人社会を束ねる上で重要な役割を果たしたという。「中華公会」は、西カリマンタン各地に支部を持ち、教育も統制していた。そこでは「標準中国語を」教えるのではなく、「標準中国語によって」教え、「祖国中国（彼ら自身が生まれたのは西カリマンタンであるにもかかわらず）」の建国を助ける「中国人」として育てるという方針が取られた [Hui 2011: 71-73]。シンカワンの「南華中学」はちょうどこの時期に設立された学校であり、設立当時からこの理念を重視していた。それまでであった華人の運営する学校においても、この路線を受け入れつつ、その内実は、それまでのどちらかという土着の華人の学校といったものが「中国人」の学校に変化していったのである。

1949年、中華人民共和国が成立すると、これらの「中国人化」した人々の間に新たな問題が生じた。「二つの中国」が並立することになり、台湾の国民党政権支持者と中華人民共和国支持者の間で対立が深まったのである。これは、西カリマンタンに生まれた華人の都市部の一部が「中国人化」した証拠である。

許耀峰によると、当時の西カリマンタンでは「藍派」（国民党政権支持）と「紅派」（中華人民共和国支持）が、学生を中心に抗争を繰り返していた。ポンティアナックの北に位置するムンパワ（Mem-pawah）は「藍派」の中心地となっていた。またシンカワンは「紅派」、ブンカヤンは「藍派」という差も見られたようである。これらの支持者の区別は掲げる旗の色で区別されていた<sup>9</sup>。当時、教育水準の高くないであろう商店の店主も、自らの支持を表すためにいずれかの色の旗を掲げていた [Hui 2011: 89-90]。

ポンティアナックでは、「紅派」と「藍派」の勢力は拮抗していた。次節で述べる「振強学校」は中華人民共和国支持であり、カトリック系の「坤甸中学」は反共産主義であった。この「坤甸中学」の立場を表す史料を許が紹介している。それは、この学校の運営委員会の議長が書いたものであるが、おおよその内容は次である。

共産主義の学校（具体的には、ポンティアナックの「振強学校」、筆者注）は、若い世代に共

<sup>8</sup> 当時、西カリマンタンの華人社会で広く読まれた新聞には、中華人民共和国支持の立場を明らかにしていた「黎明報」、中国国民党支持の「誠報」、中立の立場をとる「中華日報」があり、これらすべてポンティアナックで編集、印刷されていた。

<sup>9</sup> 筆者が内陸のサマランタン（Samalantan）でインタビューしたダヤク首長、トーマス・ムラド（Thomas Murad）も、1950年代にあった「藍派」と「紅派」が旗を掲げて抗争していたということを筆者に語った。トーマス・ムラドへのインタビュー、サマランタン、2010年11月20日。

産主義を植え付けており、学生たちもそのような学校の指針の言いなりになっている。学生をこのような学校教育から救い出すために「坤甸中学」は速やかに設立された。「坤甸中学」は公正の揺るぎない砦となるだろう。またそこで育つ学生は、我々の生活様式を守るもっとも勇敢な戦士となっている [Hui 2011: 96]<sup>10</sup>。

許も指摘しているが、1950年代の「藍派」と「紅派」の抗争は、「坤甸中学」の表明にも表れているように、「進歩」<sup>11</sup>派の「紅派」が現状を作り替えようとしていることへの保守派の華人の危機感が昂じたものであると解釈される。ではここで、1949年の中華人民共和国建国時の西カリマンタン華人社会の反応が大変鮮明に表れている例を紹介する。

### 3. 中華人民共和国成立への反応

「南華中学」卒業生の回顧録 [南中特刊委員会 2009] の中で黄振靈<sup>12</sup>は、1949年10月1日の中華人民共和国成立の知らせをラジオで聞いたときのことを書いている。彼は1949年10月1日、シンカワンのコーヒー店で、その知らせを聞き、胸の中に沸きあがる喜びと期待を感じたと書いている [南中特刊委員会 2009: 24]。以下にその部分を引用してみよう。

「南華中学」からほど近くに南光コーヒー店がある。私たち、「南中同学会」の教師はこの常連であった。店には非常に性能のよい一台のラジオがあり、私たちは祖国の放送<sup>13</sup>を聞いた。当時のシンカワンは中規模の都市であり、ラジオはそれほど普及しておらず、置いてある店は非常に稀だった。「南華中学」の教師と学生はよくこのコーヒー店に集い、ラジオを聞いていた。当時ひっきりなしに中国人民解放戦争の戦況が報道されていた。

1949年10月1日、私たちはこのコーヒー店で、天安門の城郭上の開国典礼の放送を聞いた。毛沢東主席が厳粛に建国を宣言し、中央人民政府が成立した瞬間だった。中国人民が立ち上がったという出来事に、祖国中国からは遠く隔たったインドネシアの一隅ではあったが、教師と学生の気持ちは高揚し、涙を流し新中国の誕生を祝った。祖国のたどった歴史を振り返れば、苦難の連続であり、華僑の置かれた立場は海外の孤児のようなものだった。このような日が来るとは思ってもみなかったので、その喜びはひとしおであった。

当時はまだ、オランダの勢力が残っており、蒋介石の国民政府と外交関係があった中華民国の建国記念日は、辛亥革命が始まった10月10日である（十が二つ重なるため双十節と呼ばれる）。シンカワンの中華人民共和国支持の人々はこれに反対し、10月1日（国慶節）に中華人民共和国成立祝賀会を催した。

会場の舞台の上には、幅の広い五星紅旗が掲げられた。会場を埋め尽くした人々の心は興奮に浮きたっていた。当時の「中華公会」主席、陳醒民（元「南華中学」初代校長）と、現「南華中

<sup>10</sup> この文章は1953年に「坤甸中学」が出した設立3周年記念誌の中に登場する。原題は「坤甸中学与共產主義」。

<sup>11</sup> 「進歩」は当時の中華人民共和国支持派を指す際に西カリマンタンにおいて用いられた言葉であった [Hui 2007: 94]。

<sup>12</sup> 南華中学二期生（1951年卒）。卒業後中国に戻り、江西省僑聯副秘書長を務める。また江西省の『八桂僑刊』の副編集長を務める。現在は引退。

<sup>13</sup> この中国のラジオ放送は、当時から北京、雲南を経て短波で受信されるものであった [相沢 2010]。

学」校長の曾祥鵬が最初に挨拶をすると、万雷の拍手が起きた。中国政府と毛沢東主席の通電<sup>14</sup>が用いられた大会が終わると、参加者は喜びを胸に町中を練り歩き、国旗や毛沢東の肖像とともに多くの写真を取った。[南中特刊委員会 2009: 24-25]

「祖国解放」の知らせを聞いた喜びが直接的に表現されているとともに、中華人民共和国成立祝賀会の賑やかな様子も伝わってくる文章である。

次に挙げるエピソードも同じく、当時の西カリマンタン華人エリートの政治意識の一端を浮き彫りにするものであろう。1949年12月25日のオランダからインドネシアへの政権移譲の際に起きた国旗掲揚をめぐる事件である。「南華中学」では中華人民共和国国旗とインドネシア国旗の両方を掲揚していたが、それを見たオランダ人の官憲に「共産国の国旗」をすぐに降ろすように言われたのである。当時の校長は「これは共産主義の旗ではなく、我々が中華人民共和国の国旗である」と言って中国国旗を降ろすことを断固拒否した。結局オランダ官憲は、学校の関係者が発砲しようとした、といいがかりをつけて、校長と幾人かの華人は逮捕、拘留されてしまったのである。裁判にかけられた校長は、裁判官の「なぜインドネシア国旗とともに、中華人民共和国国旗を掲揚したのか」という問いに対して「我々は中華人民共和国国民として、インドネシアの独立を祝ったのである」と答えたという。次に掲げるのは前項と同じ黄振靈による文章である。

オランダからインドネシアへの政権移譲を祝う際に「南華中学」ではインドネシア紅白旗に加え、中華人民共和国国旗を掲げたことが問題となった。これが「掲旗事件」である。その詳細は以下のようであった。

我々が校庭に旗を掲げたところ、シンカワンの警察局政治部警官の葉小華と他5名の警察官がやってきて「共産党旗」を降ろすように命じた。曾校長は落ち着いた口調で言った。「降ろせと言っているのは、インドネシア国旗であるか、それとも中国旗であるか？」

オランダ警察の葉小華は「共産党旗である」と言った。校長はすこし口ごもった後、厳しい口調で次のように言った。「ここには共産党旗はない。あるのはただ中華人民共和国の国旗とインドネシアの国旗だけである。これはあなたがたの関与するところではない」

校長は続けてさらに次のように言った。「国際連合憲章には、あらゆる公民は、本国政府を選択する権利を有するとある。我々華僑は中華人民共和国政府を選ぶ。よって私たちが行っていることは法律違反ではない」

オランダ当局から旗をおろさせるよう命令を受け、任務を遂行しなければならない立場にあった葉小華はそれを受けてこう言った。「旗を降ろせ」

校長は毅然とした態度でこれに対応した。「一度揚げた旗は夜になるまで降ろすわけにはいかない。絶対に降ろせない」

その周りにいた教師や学生は拍手をして校長に続いた。「そうだ！そうだ！」

葉小華は2人の部下に力づくで旗を降ろすように命じ、警察と学生たちの間で押し問答になっ

---

<sup>14</sup> 通電とは同文電報であり、当時の外交手段として重要であった。

た。膠着状態の中で葉小華はインドネシア語で下士官に向かって「発砲しろ、発砲しろ」と指示し、それに気づいた学生たちは散り散りになった。下士官の一人が実際に撃った弾丸の一つがすれすれのところをかすめると、校長は弾を逃れるために校門の前の排水溝に身をうずめた。

曾校長と学生一人が警察によって拘留された、という知らせはまたたくまに広がり、シンカワンだけでなく西カリマンタン全域の華人の抗議運動を招くことになった。警察はその晩、2人を釈放したが事態はこれでは収まらなかった。警察は、校長が学生に発砲するように扇動したと、事実と異なる情報を発表したのである。曾校長を支持する西カリマンタン華人は多く、ジャカルタ、ポンティアナックの中国語紙は、インドネシア各地の華僑団体からの曾校長への応援文を掲載した。さらにシンカワン中華公会は裁判所に手紙を送り、校長の無罪を主張した。裁判の弁護は、ポンティアナックで著名な黄真節が無償で引き受けることになった。

シンカワン地方法廷は1950年4月6日に開かれた。傍聴席は満員で、外も人で埋め尽くされた。華人のほかには少なからずプリブミ<sup>15</sup>の姿も見られた。オランダ人の裁判官のもと、裁判は終始オランダ語で行われたため、通訳つきで行われた。

裁判官「どうして中華人民共和国国旗を掲げたのか？このことについて、あなたは過ちを認めるか？」と校長に尋ねた。

それに対して校長は次のように答えた。「ジャカルタのインドネシア国家準備委員会<sup>16</sup>主席からすでに公開で通告があり、インドネシアに政権が移譲されるこの日に新中国を擁護する華僑は、新中国の国旗をインドネシア国旗とともに掲げてよいとされている。国際連合憲章によると、各国の公民は自分の国家を選択する権利を有するとされる。我々は中華人民共和国を自らの祖国として選択し、国民党政権は承認しない。我々は新中国を擁護する華僑の身分において、インドネシアの政権移譲に祝賀の意を表するものである。よって、我々は中華人民共和国国旗を掲揚したのである。これに関して何か問題があるだろうか」

これに続き、証人として2人の警察官が登場したが、彼らは明らかに混乱しているようであった。一人が、「被告の曾校長は学生たちに発砲するように指令を出した」と証言した。その口調は小学生が暗誦しているかのようなたどたどしいものであった。それを受けて曾校長は裁判官に対して「この証人に質問をしてもよいですか？」と要求した。

裁判官は頷くと、手ぶりで質問の許可を与えると、曾校長は証人にこう質問した。「あなたは中国語が理解できるのでしょうか？」

その警察官は声を張り上げて「理解できない」と言ったところで、曾校長はすかさず「理解できないのなら、どうやって私が学生に発砲を命じたということが分かったのか？」と尋ねた。

警察官はますます混乱してどうしてよいかわからない様子であった。校長は身を翻して裁判官に対して発言した。「この証人は嘘の供述をしています。私は裁判官に対し、法律に基づいて彼に懲罰を与えるように望みます」

<sup>15</sup> 原文では「印人」である。プリブミ（Pribumi）とはインドネシアにおける非華人の現地民を指す。

<sup>16</sup> この組織について詳細は不明であるが、ここで引用している南華中学の記念誌の表記は「印尼国家籌委會」である。また、当時のこの組織の主席は隆姆という人物である〔南中特刊委員会2009:27〕。これは、オランダからインドネシアへの政権委譲に際して、華人の主張を代弁する組織であったと考えられる。なぜなら、この組織の表明したスタンスをシンカワンの「南華中学」の校長も認知しており、これを自身の意見表明の根拠としているからである。

さらに校長は続けた。「それだけではない。警察は私たちに向かって発砲したのだ。銃を乱発する行為は違法行為である」

これによって被告と原告が入れ替わったのである。これに続いて、黄信節弁護士は曾校長を弁護した。最終的に裁判官は、警察官の面子のために校長に2週間の禁固刑を言い渡したが実行されなかった。いわゆる名義上の刑罰である。最後に裁判官は曾校長に、判決に不服な場合、提訴することもできることを付け加えた。

曾校長は身を起こして「ならば提訴する」と言おうとしたところ、それを遮るように黄弁護士が立ち上がって曾校長にささやいた。「複雑な政治状況の中でこのような結果になること自体が非常に困難なのだ。これで引き下がるべきだ」。こうして裁判は終わり、1人のプリブミの友人が身を乗り出してきて次のように校長に言った。「たいしたものだ、本当におめでとう！」[南中特刊委員会 2009: 25-28]。

当時の高等教育を受けたシンカワン付近の華人は、自分たちをインドネシアの外側にいるものと位置づけ、外国人として「友邦インドネシア」の独立を祝うという意識を持っていたのである。また、「我々は中華人民共和国に連なる者」という政治意識が明確に表れているものの、オランダの官憲の「共産旗を下げろ」という要求に対して、「あれは共産旗ではない、中華人民共和国の国旗である」と弁明するような曾校長の言動やそれに同調する様子は、イデオロギーとしての共産主義を強調しそれを奉じているというよりも、中華人民共和国に連なるものであるという意識が全面に出ていることを表しているといえよう。

#### 4. シンカワンとポンティアナックの中国語教育機関

本節ではシンカワンの「南華中学」、ポンティアナックの「振強学校」、「坤甸中学」の実例を示す中で当時の華人の教育がどのような性格を持つものであったのかを詳述する。

シンカワンには、「南華中学」設立以前から、いくつかの教育機関が存在した。華人自身が作った小学校である「培南学校」、「維新学校」、「中華学校」、「南光学校」である<sup>17</sup>。「南華中学」を卒業した阿強 (A Khiong) によると、当時シンカワンには4つの小学校があったという。その他に彼が卒業した「南華中学」の他に、カトリック系の「真光小学」、「真光中学」、「印度尼西亞中学」である。「南華中学」やその他の小学校にはジャカルタにあった「八華中学」、「華僑中学」出身者が教師として教えに来ていたという。後に「南華中学」の初代校長となる陳醒民は、これらの小学校を卒業した子弟の進学先として「南光中学」、「華僑中学」を設立した。1942年、彼の開いた「南光中学」、「華僑中学」は日本軍によってその他の学校と共に閉鎖された [南中特刊委員会 2009: 16-17]。

日本降伏後、シンカワンの中華教育委員会は、「中華公学」という名前の小学校を再び設立した。そしてその校長には陳醒民が就任した [南中特刊委員会 2009: 17]。当時、シンカワンには高等教育

<sup>17</sup> 1927年シンカワン生まれでシンカワン在住のサン・リモ (San Limo, 別名 Fung Ku) へのインタビュー、シンカワン、2011年12月28日。彼はオランダ時代にオランダ式の教育と中国語教育の両方を経験している。1950年代には彼は、シンカワンの映画館で仕事をした。またこれらの学校は、1935年に出された「巴城新報25周年記念特刊」の中の「東印度華校調査表」の中に簡単な紹介がある。それによると、シンカワンの「中華学校」は1912年、「培南中学」は1919年設立である。

機関が存在しなかったため、経済条件の良い少数の家庭の子女はポンティアナックやジャカルタの学校に進学した。さらに1948年2月25日、陳醒民は小学校卒業生のために「南華中学」を正式に開校し、自身が校長を務めた。学校での使用言語はすべて標準中国語とされた〔南中特刊委員会 2009: 17〕。ジャカルタにある南華中学校校友会は、現在に至るまで活動が活発であるが、この組織が出版した記念誌〔南中特刊委員会 2009〕には多くの卒業生の回顧録が掲載されている。以下では主にこれによって、当時の状況を述べる。

1960年代初頭に結成され2012年現在まで存続している「山口洋南華中学旅椰校友会（ジャカルタ南華中学校校友会）」は、同校の卒業生から成る組織である。会長を務める蔡伝賢は、「南華中学」の変遷を3つの時代に区切って説明している。第1の時期は、1950年代初頭に新中国成立に沸きかえった時である。この時代、多くの教師が中国から戻ってきて教鞭を取った。彼らが新しい思想を持ち込んだのである。彼らの影響で、学校卒業後に中国に更なる教育の機会を求めて移住する卒業生が多かった。

第2の時期は、1950年代中期以降である。この頃になると中国への移住は減少し始め、代わってジャカルタの移動が増えていく。これは、ジャカルタの高等教育機関の発展と軌を一にする動きであろう。一部は中国に渡るものの、インドネシアに残るものも少なくなかった。彼らの中には、ジャカルタに行って学問を続ける者、あるいは各地の小学校や農村で教職に就く者が多かったようである。この時期の学校で教鞭をとる者は、ジャカルタにあった「華僑中学」や「八華中学」の卒業生が多かった。

第3の時期は、1950年代終わりから1960年代初めである。この時期の「南華中学」の方針は、当時の政治変動の影響を受けて変化した。当時の校長であった謝庭鵬は、学生のインドネシア語の能力を高めることを重視した。1963年、スカルノが「新植民地主義の産物であるマレーシア」に対して反発し、闘争を展開すると、世界の反帝国主義、反植民地主義の潮流の中、多くの南華中学の学生はインドネシアの政治動向に注目し始めた。彼らはスカルノの思想を、彼が得意とする演説から学んだ。彼らの中には、次第に「僑民」思想<sup>18</sup>を捨てて、インドネシア人民と共同で戦うという思想を持つ人々も現れた。「労働人民の生産闘争を実践するために」一部分の学生と教師は労働班を組織し、授業後、田畑を耕した。しかし、1965年9・30事件が起きた後、状況は一変し、1966年4月22日、「南華中学」は閉校となったのである〔南中特刊委員会 2009: 22-23〕。

これが「南華中学」の設立から閉鎖に至る大まかな経緯である。初代校長であった陳醒民の教育への貢献は以上のとおりであるが、陳の後、1948年に同校の校長に就任した曾祥鵬の経歴を見てみよう。1940年末、曾祥鵬は母親の意向で中国に「帰国」することになった。太平洋戦争が勃発し、当時16歳であった曾も戦争に巻き込まれ、ビルマ戦線で日本と戦う中国遠征第5軍の少尉として戦った。その後、雲南省の「保山華僑中学」、「雲南農業学院」で社会学を修め、北京の清華大学を卒業した。その時、「南華中学」を設立して間もない陳醒民の誘いを受け、シンカワンに戻って同校で教え始めた〔南中特刊委員会 2009: 46-48〕。彼は、1951年後半にポンティアナックに移り、半年ほど「振強学校」の教師を務めた後、1952年から1956年までスマラン（三宝龍）や、インドネシアで三番目

<sup>18</sup> 僑民とは、文字通り「仮住まい」を表すが、ここではインドネシアに今住んでいるといってもいずれは中国に帰るのだという意識を持った人々の意である。

に歴史が古く、八華中学に次いで著名な中華中学（中華会館系）で教鞭をとった。また、中国語紙『生活報』の編集に携わった。

後に「南華中学」の教師となる鄭仲驩は、1917年、シンカワンの裕福な家庭に生まれ、当時、陳醒民が教鞭を執っていた「南光中学」、「華僑中学」で学び、卒業後中国へ渡った。曾と同様に、雲南省の「保山華僑中学」を卒業し、抗日戦争の一時期をそこで過ごした。戦争が終わった後、生まれ故郷のシンカワンに帰り、創立間もない「南華中学」で理科系の科目を教え始めた〔南中特刊委員会 2009: 42〕。

「南華中学」には、シンカワン周辺の出身で、中国に渡って高等教育を受け、シンカワンの教育界からの依頼により故郷に戻り、教鞭を執る教師が多かった。彼らが西カリマンタンの華人社会に、中華人民共和国成立前後の中国の思想状況を伝えたのである。彼らは、「南華中学」を卒業した優秀な学生が、北京大学、清華大学といった中国の名門校に進学することを期待していた。

楊世俊（南華中学 1952 年卒）<sup>19</sup> は、当時の曾校長からの言葉を次のように記憶している。「お前は何かあっても勉学を続けなくてはならない。お前は学費を納めなくてよい。お前には清華大学や北京大学に合格するだけの素質がある」〔南中特刊委員会 2009: 48〕。曾は、貧しい家の出身であった楊の事情を悟り、このように言って学費を免除し、勉学を続けさせたのである。北京大学に学び東南アジア華人研究の分野で大きな成果を残している廈門大学南洋研究院の蔡仁龍もシンカワンの南華中学出身（1950 年卒業）である〔南中特刊委員会 2009: 32-33〕。

当時の卒業生の行動が如実に表れているのが「南華中学卒業生の現在の居住地」（表 1）である。これを参照すると、その 1 期生（1948 年）から 1950 年代中ごろまでの卒業生に占める現在の中国在住率は非常に高く、卒業年によっては 70% ほどの卒業生が中国あるいは香港に滞在している。1950 年代前半までは、そのまま中国に移住する傾向が顕著だが、1956 年からは半数を割るようになり、さらに減少の一途をたどる。そして 1960 年代に入ると、中国への渡航者自体がごくわずかとなる。それに代わって上昇するのが、ジャカルタなどインドネシア内の移動者である。中国への在住者の数は 1956 年から減少し始め、特に 1956 年以降に「南華中学」を卒業した人たちは、多くはジャカルタに住むようになる。この傾向は 1966 年 4 月 22 日に「南華中学」が閉校となるまで続く。彼らの中国への帰還は、1950 年代前半に集中しており、その後、インドネシアの他地域、特にジャカルタへの移動が主になっていく様子がうかがえる。ただ、この表が示すのは彼らの「現在の」居住地であり、「いつ」移動したか、また再移動の経緯に関してはここからは分からない。しかしながら、1960 年代初めには、ジャカルタに「山口洋南華中学旅椰校友会」が設立されていることから、彼らは 1950 年代後半にはすでにジャカルタに移動していたと推測される。この背景には、ジャカルタにおける中国語で教育が行われる教育機関の発展が挙げられる。シンカワンの「南華中学」は、あくまで中学校であり、高等学校レベルでは、ポンティアナックでは「振強学校」と 1950 年代後半に高等部ができた「坤甸中学」しかなかった。後者については、1958 年にインドネシア学校に再編されており、実質上「南華中学」卒業生が高等学校に進学する場合にはポンティアナックの「振強学校」に行くか、ジャカルタの「中華中学」あるいは「八華中学」に行くかという選択肢しかなかったのである。

<sup>19</sup> 彼は 1952 年に南華中学を卒業し、その後中国に帰還した。中国で大学を卒業し、現在天津大学で教えている〔南中特刊委員会 2009: 48〕。

表1 「南華中学」卒業生の現在の居住地

卒業時期	中国・香港	インドネシア	その他	不明	合計	中国在住者の全体に占める割合 (%)
1948年7月	11	8	0	4	23	48
1950年12月	21	2	0	12	35	60
1951年7月	22	2	0	10	34	65
1951年12月	17	4	2	8	31	55
1952年7月	18	4	3	7	32	56
1952年12月	36	16	1	33	86	42
1953年7月	21	2	1	10	34	62
1953年12月	42	10	0	8	60	70
1954年7月	37	8	5	15	65	57
1954年12月	75	39	4	22	140	54
1955年7月	27	17	0	12	56	48
1955年12月	51	30	0	21	102	50
1956年7月	30	40	1	25	96	31
1956年12月	21	34	1	66	122	17
1957年7月	34	23	0	26	83	41
1957年12月	24	27	1	47	99	24
1958年7月	29	33	0	37	99	29
1958年12月	32	34	0	10	76	42
1959年7月	16	24	4	34	78	21
1959年12月	7	39	1	19	66	11
1960年7月	3	31	0	5	39	8
1960年12月	1	35	0	13	49	2
1961年7月	2	34	1	9	46	4
1961年12月	3	26	0	24	53	6
1962年7月	1	29	1	17	48	2
1962年12月	0	29	3	16	48	0
1963年7月	2	20	3	9	34	6
1963年12月	0	73	5	14	92	0
1964年7月	0	56	2	10	68	0
1964年12月	2	26	0	13	41	5
1965年7月	2	47	2	28	79	3
1965年12月	0	38	1	21	60	0
1966年4月22日	5	90	0	30	125	4

[南中特刊委員会 2009: 311-336] をもとに筆者作成

もちろん、中国語を教授言語とする大学はインドネシア国内にはなく、もっとも近くにあったのは、シンガポールの「南洋大学」（現南洋理工大学）であった [田村 2013]。1950年代後半にジャカルタへの進学が増えたことが、1960年代初めの「ジャカルタ南華中学校友会」設立につながったのであろう。

#### 4-1. 「南華中学」の教育状況

「南華中学」では、基本的に中国の学校と同じ教科書が使われた。ある卒業生は当時の授業風景について次のように語っている。初代校長の陳醒民が退任した後、代わって1948年秋には曾祥鵬が校長に就任した。曾校長はその他の教師陣と協力し、政治、言語、歴史に関しては、自身で教材を作成した。曾校長は、社会発展史、歴史唯物論、弁証法を教え、李冰は中国の労働者の状況、農民からな



写真1 山口洋邦夏青年旅行歌劇団（1950年7月）  
[南中特刊委員会 2009: 195]

る紅軍5千里の長征，西カリマンタン華僑の開墾史，彼らのオランダ政庁への抵抗の歴史について講じた。廖文仲は中国語の購読と作文を教えた。また彼は課外で読み物の指導をし，世界の名著を理解する能力を養わせた [南中特刊委員会 2009: 18]。また，学生たちのために，教師は資金を融通して，図書館を創設した [南中特刊委員会 2009: 20]<sup>20</sup>。

学校の方針として，学内の勉強だけでなく，課外活動，社会活動への参加が勧められた。学生たちの自発的な運動も盛んであり，日常の学生活動を運営する学生自治会や女子学生会が組織された。学生会には主席，学習委員，生活委員，財務委員などの役割分担があった。また合唱団，バスケットボールクラブの活動，各種の文化活動も盛んであった [南中特刊委員会 2009: 19]。

1950年夏，「南華中学」の学生は，プマンカットの学生と共同で組織される「山邦青年旅行歌劇団」を結成した（写真1）<sup>21</sup>。この劇団は，シンカワンだけでなく，ジャワイ（Jawai，前出のプマンカットよりも北に位置する町），スクラ（Sekura）ブンカヤン（Bengkayang），モントラド（Monterado），スンガイ・ピニユ（Sungai Pinyuh）でも公演を行った。彼らはその劇中で祖国の解放を宣伝して回り，各地で教育のための資金を募った [南中特刊委員会 2009: 19]。この山邦青年旅行歌劇団の写真が記念誌内に掲載されているが，ここには中国の革命を演劇化したと思われる様子が表現されている。集合写真の背後には，毛沢東の大きなポスターが掲げられている [南中特刊委員会 2009: 195]。

<sup>20</sup> 1966年に「南華中学」が閉校となり，中国語図書はスハルト政権によって全面的に禁止となったため，この図書館に収められた蔵書は全部焼き払われた。

<sup>21</sup> 「山邦」の名は，シンカワンの中国名である「山口洋」と，プマンカットの中国名である「邦夏」の頭文字から取ったものである。

また南華中学には「南中女同学会」という女性の組織があった。この組織は愛国的精神が強く、中華人民共和国を支持し、封建制度からの女性の解放をテーマとした雑誌を発行した。そこでは中華人民共和国では男女平等が基本となり、女性は儒教の桎梏から解放されるのだと強調された〔南中特刊委員会 2009: 31〕。では当時のポンティアナックの教育機関の状況はどうだったのであろうか。

#### 4-2. ポンティアナックの高等教育機関

ポンティアナック在住で後に新聞記者として活躍した華人である、マリウス・A. P. (Marius A. P., 中国名は白聰賢)<sup>22</sup>によるとポンティアナックには、「坤甸中学」「振強中学」<sup>23</sup>「華僑中学」<sup>24</sup>の3つがあった。このうちポンティアナックで特に影響力が強かったのは、「坤甸中学」である。この中学校を設立したのは当時中国を拠点に活動していた修道会である「主徒会」(ラテン名 *Congregatio Discipulorum Domini*) の修道士であった<sup>25</sup>。当時「主徒会」は、中国で共産主義からの弾圧を受けて台湾に移り、台北を中心に活動していた。

当時、ポンティアナックのサント・ヨセフ教会を率いたのはオランダ人司教のタルシシウス・ファン・ファレンベルク (Tarcisius van Valenberg) であった。当時、オランダ式の華人向けの教育機関であるオランダ中国人学校 (HCS) は存在していたが、華人に対する教育環境が整っていると言える状況ではなかった。彼は華人への教育の遅れの危惧から、中国語で華人の教育に携わることのできる教師陣を備える必要を感じていた。ポンティアナックの華人の大部分は潮州語や標準中国語しか解さなかったからである。

そこで司教は、当時台湾で活動していた主徒会の神父たち6人を1949年3月26日、ポンティアナックに招聘した。そして翌1950年に、「坤甸中学」を建設し、6人はそこで教鞭をとることになった。当初は、英語で「ポンティアナック・ミドル・スクール (Pontianak Middle School, PMS)」と呼ばれていたが、華人の間では、「坤甸中学」(略して「坤中」) という呼び名で親しまれていたという [Gereja Katedral Santo Yoseph Pontianak 2011: 48-49]。

しかし坤甸中学は、1958年に中国語学校からインドネシア語で教授される学校に代わった。この年に起きた、スマトラを中心とする「インドネシア共和国革命政府 (Pemerintah Revolusioner Republik Indonesia, PRRI)」の反乱<sup>26</sup>を、台湾の国民党政権がアメリカ合衆国の後ろ盾を得て支援していたことで、インドネシア政府が国内の台湾系機関を全面的に禁止したのである。これにより校名も「カリマンタン学校 (Sekolah Kalimantan)」に改められ、中国語のカリキュラムは廃止され、イ

<sup>22</sup> マリウスは、1939年ポンティアナックに生まれ、1950年代に写真家として活躍。1962年にスカルノ大統領がポンティアナックを訪問したときには、彼がその報道写真を多く撮影している。スハルト期の1976年、華人として初めて、インドネシア語の新聞ハリアン・ムルデカ (Harian Merdeka) の新聞記者となったことは誇りだという。マリウスへのインタビュー、ポンティアナック、2011年12月20日。

<sup>23</sup> ポンティアナックの「振強中学」の設立は古く1906年である。その他に、「中華学校」(1908年設立)があった。「巴城新報 25周年記念特刊: 東印度華校調査表」参照。

<sup>24</sup> 李開訓という人物がフランス留学から帰ってきて、ポンティアナックに1938年「坤甸華僑中学」を開き、校長になる。日本占領時代が終わった後、坤甸華僑教育委員会の管理のもと、「中華中学」が設立された。『千島日報』2011年2月1日。

<sup>25</sup> カトリック教会修道会の一つ「ドミニコ会」。戦前に活躍したコンスタンティーニ (Constantini 漢名は剛恒毅) が1927年に創設した団体。

<sup>26</sup> 1958年、スカルノらの左傾に反対した政治家らがスマトラ島中部に位置するブキットティンギ (Bukittinggi) を本拠地に定めて結成を発表した臨時政府であるが、すぐにインドネシア正規軍に鎮圧された。

インドネシア語のみで教授される学校となった<sup>27</sup>。

「坤甸中学」とは異なり、共産党系であったポンティアナックの「華僑中学」と「振強中学」の2校は、9・30事件後、1966年にシンカワンの「南華中学」と共に閉校となった。「振強中学」とカトリック系の「坤甸中学」は没交渉であった。「坤甸中学」の実情について、「振強中学」の卒業生である林世芳はまったく知らなかった。彼女は「台湾系の「坤甸中学」とはほとんど交流が無かったので本当のことはよく分からない」と筆者に述べた<sup>28</sup>。また「坤甸中学」に関わり、その後の「カリマンタン学校」の校長を長らく務めたジミー・シマンジャヤでさえ、「振強中学」についてはほとんど情報が無いと述べた<sup>29</sup>。1950年代のポンティアナックのこの2つの学校の絶縁ぶりは徹底したものであったようである。

## 5. おわりに

本論者は、1950年代の西カリマンタン華人社会の教育を考察することにより、彼らの自己認識を理解することを目的としていた。1960年代に、インドネシア国家の実質的な領域支配が西カリマンタンに及ぶ前に、西カリマンタン華人がいかに中国ナショナリズムの影響を受け、それに呼応するような教育体系を作り上げていたかについては本論中に仔細に述べた。

19世紀以前には、客家語や潮州語といった現地語を用いた初等教育が普及していたが、20世紀に入り、中国ナショナリズムの興隆、日中戦争、中華人民共和国成立という一連の歴史過程の中で、西カリマンタン華人の中国への関心と自己同一化の度合いは高まっていった。これを支えたのが、民族主義的色彩を持つようになった在地的教育機関であり、また、中国の思想的影響を受けた中等教育機関も西カリマンタンに誕生した。これらの学校も第二次世界大戦後には、より系統的に整備され、標準中国語を教授言語とした学校に生まれ変わっていく。さらに、このような学校を卒業した学生は、中国の大学に進学することを念頭に入れており、実際に多くの学生が中国に渡った。

しかしながらそれぞれの学校の志向性は多様であった。直接に中国の共産主義の影響を伝えるものもあれば、ポンティアナックの「坤甸中学」のようにカトリック色が強いものもあり、これは華人の運営する学校とはいえ、必ずしも「中国への帰属意識」には直接つながらないものもあった。それでもなお言えることは、以上述べてきたような西カリマンタンの教育の状況は、ジャワのプラナカン華人ともインドネシアナショナリズムとも接続しづらく、より中国やシンガポールの中国語を共有する「想像の共同体」へと接続していたということである。

## 参考文献

### 史料

Gereja Katedral Santo Yoseph Pontianak, *Buku Kenangan 100 Tahun*, 2011.

Nio Ju Lan, *Riwayat 40 Taoen dari Tiong Hoa Hue Koan Batavia (1900-1939)*, Batavia: Tiong Hoa Hwee Koan, 1940.

南中特刊委員会『山口洋南華中学創校六十周年記念特刊』2009年。

<sup>27</sup> 1980年代、「カリマンタン学校」は、カトリック学校「サント・ペトルス校 (Sekolah Santo Petrus)」として有名になり、華人が多く好んで入学する学校となった。1980年代から、中学課程と高校課程の両方を担う学校として現在まで発展している。ジミー・シマンジャヤへのインタビュー、ポンティアナック、2011年12月15日。

<sup>28</sup> 林世芳へのインタビュー、ジャカルタ、2012年6月15日。

<sup>29</sup> ジミー・シマンジャヤへのインタビュー、ポンティアナック、2011年12月15日。

## 1950年代西カリマンタン華人社会における学校教育

『千島日報』ジャカルタ，2011年2月1日。

「巴城新報廿五週年記念特刊：東印度華校調査表」，新報，1935年。

### 研究書

#### 日本語

相沢伸広『華人と国家：インドネシアの「チナ問題」』書籍工房早山，2010年。

アンダーソン，ベネディクト（糟谷啓介ほか訳）『比較の亡霊：ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社，2005年。

アンダーソン，ベネディクト（白石さや・白石隆訳）『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山，2007年。

石川登『境界の社会史 国家が所有を宣言するとき』京都大学学術出版会，2008年。

田村慶子『多民族国家シンガポールの政治と言語：「消滅」した南洋大学の25年』明石書店，2013年。

#### 英語

Coppel, Charles, *Studying Ethnic Chinese in Indonesia*, Singapore: Singapore Society of Asian Studies, 2002.

Hui, Yew-Foong, *Stranger at Home: History and Subjectivity among the Chinese Communities of West Kalimantan, Indonesia*, Leiden: Brill, 2011.

Lohanda, Mona, *Growing Pains: The Chinese and the Dutch in Colonial Java, 1890-1942*, Jakarta: Yayasan Cipta Loka Caraka, 2002.

Somers Heidhues, Mary, *Golddiggers, Farmers, and Traders in the "Chinese Districts" of West Kalimantan, Indonesia*, Ithaca: Cornell University, 2003.

#### インドネシア語

Bamba, John, *Mozaik Dayak: Keberagaman Subsuku dan Bahasa Dayak di Kalimantan Barat*, Pontianak: Institut Dayakologi, 2008.

#### インタビュー

トーマス・ムラド，サマランタン，2010年11月20日。

李紹発，ボンティアナック，2011年1月13日。

ジミー・シマンジャヤ，ボンティアナック，2011年12月15日。

マリウス・A. P.，ボンティアナック，2011年12月20日。

サン・リモ，シンカワン，2011年12月28日。

林世芳，ジャカルタ，2012年6月15日。